

世界保健機関（WHO）のたばこ規制枠組み条約が発効して四年。たばこによる健康被害は広く認知され、受動喫煙防止のために飲食店など公共の場での喫煙を法律で全面禁止する動きが世界的に広がっている。一方日本では、二〇〇三年に受動喫煙防止をうたった健康増進法が施

**漂ったおと**

東京駅丸の内地下北口「動輪の広場」にある喫煙ルーム。ガラス張りの室内には七台の空気清浄装置が置かれ、愛煙家たちがたばこをくゆらせている。入り口の自動ドアには「ドア付近にお立ちになりますとドアが開放になり、煙が外に出てまいります」との張り紙。

だが、ドアの近くに立ちどまりつづまいが、ひっきりなしの人の出入りでドアはほとんど開いたまま。吐き出された煙は室外にも流れ、地下通路内にもびたよつたにおいが漂っている。

「最新型の喫煙室でも漏れの防止は難しい」と産業医大の大和浩教授は指摘する。〇七年七月にデビューしたN700系新幹線。全席禁煙だが、四力所計六つの喫煙室が設け

行されたものの、罰則のない努力義務のため禁煙化は一向に進まず、分煙にとどまる施設が多い。「分煙では必ず煙が漏れ、受動喫煙を防げない。日本は世界の潮流から取り残されている」と研究者らは危機感を募らせる。

# 進まない受動喫煙対策 分煙は防止効果なし

世界は  
全面禁煙へ

られている。大和さんは、粉じん計で喫煙室の外に煙が漏れていないかどうかを測定した。

**従業員に被害**

すると、ある喫煙室では三十分間に二十人が利用し、計四十回ドアが開閉、これに伴い

検知可能な煙粒子が含まれ、客室などに持ち込まれていることが分かった。

飲食店の状況はさらに深刻だ。同大研究室の中田ゆりさんによると、喫煙が自由な居酒屋での測定では、最高値は喫煙室の上限値の十八倍以上。同じフロアに喫煙席と禁煙席を設けた、分煙も十倍

の店で喫煙席で十倍超、禁煙席でも七倍を超える時間帯があった。

「客と、未成年者を含む従業員の健康被害を防ぐためには完全禁煙しかない」と中田さん。

しかし、実際の制度づくりは遅れている。神奈川県が制定を目標としている全国初の禁煙条例も、当初は飲食店

も含め全面禁煙の方針だったのに、業界や議会などの反発の一部に分煙を認めるなど妥協を重ねている。

同条例検討委員でもある中田さんは「国立がんセンターの推計では、日本では一年間に受動喫煙で二万九千三百二十人が死んでいる。安全な空気を得ることは基本的な人権。受動喫煙の害について一層の啓発が必要だ」と話している。

2. 26

**飲食店での受動喫煙に関する意識調査**

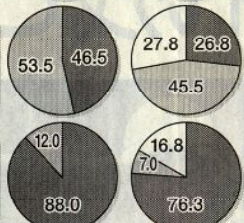
ほかの客のたばこの煙で不快な思いをしたことがあるか



全体

喫煙者

非喫煙者



※ファイザーによる「四地五人のため合計が100%にならない場合がある

**重ねる妥協**

製菓企業ファイザーが昨年、喫煙者而非喫煙者計八百人に実施したアンケートでは、外食の際に他人のたばこで不快な思いをしたことがある人は67%に上った。注目されるのは、喫煙者でも47%が不快感を訴えている点だ。



東京駅丸の内地下北口「動輪の広場」にある喫煙ルーム。頻繁な人の出入りで自動ドアはほとんど開いたまま